

カンティヨン、ケネー、テュルゴー

——18世紀フランス価値論形成史に関する一考察——

青山学院大学経済学部

中川辰洋

本報告は、18世紀を代表する経済学者リシャール・カンティヨン、フランソワ・ケネーそしてオーヌ男爵アンヌ・ロベール・ジャック・テュルゴーの3人の価値論を考察するとともに、それらの経済学の古典形成への貢献と意義を明らかにすることを主たる目標とするものである。はじめに報告の概要を示せば下記のとおりである。

はじめに

1. カンティヨン、ケネー、テュルゴーの価値学説

- (1) リシャール・カンティヨン
- (2) フランソワ・ケネー
- (3) アンヌ・ロベール・ジャック・テュルゴー

2. 価値学説の意義と問題点

- (1) 価値源泉論の名目性
- (2) 価値と価格の関係性
- (3) 価格メカニズムと資源分配の関連性

3. 18世紀フランス価値学説形成史の再考

むすびにかえて

ここでカンティヨンの価値論を出発点としたのは、「リシャール・カンティヨンと経済学の国籍」の著者ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズをしてわがエールの民の著書『商業一般の本性に関する試論』が「租税の問題をのぞけば〔中略〕ほとんど経済学の全領域」にわたっており、「他のいかなるえりぬきの労作よりも、より際立って『経済学の揺籃』」といわしめたことを受けてのことであるが、そのなかには当然ながら価値論や価格論もふくまれる。ことほどさように、ジョゼフ・J. スペングラは、カンティヨンの経済学史上最大の貢献は「価格システムの働き」にあるとまで言い切っている。商業社会の規範である商品の価格が需要と供給の比率により決定されると説いた史上最初の人物はほかならぬカンティヨンであり、かれの価値論はケネー、テュルゴーをはじめ後世多くの研究者の継承するところとなっている。

もっとも、これら3人の価値論を立ち入ってみていくと、「カンティヨン→ケネー→

テュルゴー」のラインをたどりつつ 18 世紀フランス価値論研究が発展をとげたというわけではない。第 1 に、カンティヨンが価値の源泉を土地（や労働）にもとめたのに対して、ケネーの「人間論」やテュルゴーの『富の形成と分配に関する諸省察』や「価値と貨幣」などに目を通せば、人間の主観あるいは欲求・欲望などに起因すると説いているように際立った相違を認めないわけにはいかない。前者の価値論が客観価値学説、後二者のそれが主観価値学説の系譜に属するといわれるゆえんである。この点に限れば、あたかも「ケネー→テュルゴー」のラインを描き得るかのようである。

ところが、カンティヨンも、ケネーも商品に内在する価値をどのように測定するのかという段に話が及ぶと明確な説明を行ってはいない。とくにケネーがそうであり、かれの価値論を「名目的主観価値学説」と見付けたフィリップ・ステーネルやジルベール・ファッカレロらの言い分が正しいとすれば、カンティヨンのそれもまた「名目的客観価値学説」といわざるを得ない。その意味からすれば、ケネーとテュルゴーの相似性よりも、むしろカンティヨンとケネーの間にこそ共通性を見出すことになる。かたやテュルゴーは、人間の精神において主観的に導かれる「尊重価値」が交換の条件である「評価価値」を決定するありようの説明を試みている。これがいまひとつの論点である。

さらにいまひとつ、より重要な点であるが、「価格システムの働き」の意味に関してである。ケネーは事実上この問題にほとんど言及しておらず、この点、カンティヨンとテュルゴーの理論的継承関係はケネーとテュルゴーのそれに比べてよりクリアである。ケネーにあっては、自然的条件により極端な過不足の生じるケース（豊作や凶作）を除外した「平常時」の価格、ありていにいえば需要と供給が一致して、カンティヨン流の均衡価格を意味する「内在価値」にヒントを得た「基本価格」と市場価格とが同一となる状態をつねに想定しているかのようである。これに対して、カンティヨンおよびテュルゴーは、需給の比率により規定される商品の市場価格は内在価値または基本価格を中心に騰落すると説くのであるが、それはまた価格の変動を介して社会的諸資源が適正に分配される過程を意味する。ただカンティヨンが価格の調整を企業者の機能にもとめたのに対して、テュルゴーは利潤最大化を追求する資本の運動にもとづくという（注）。もちろん、この相違は両者の見解に起因するのではなく、テュルゴーがカンティヨンの理

(注) 周知のように、アダム・スミスは『国富論』第 1 編第 7 章で市場価格の自然価格からの乖離を論じ、また第 4 編第 2 章では乖離の調整が有名な「見えざる手 (invisible hand)」によるものとしている。資源分配論をふくむ前者の議論について、エール出身の経済学者でカンティヨンの評伝『リシャール・カンティヨン』の著者アントイン・E. マーフィーは、スミスが「カンティヨンから [資源分配論を] 借用していることは明らかであるが、スミスはこれを認めていない」といつている。ただカンティヨンは、スミスと違って資源分配論を企業者の活動——たとえて言えば「企業者の見える手」によるもの説き、一方のテュルゴーはカンティヨンの所説をさらに一歩先に進めて「資本の競争」にこれをもとめた。しかもテュルゴーの場合、ジョエル=トマ・ラヴィックスやポール=マリー・ロマーニのいうように、市場価格と「市場生産価格」に相応する「金銭的価値」とが「実質的に収斂するということや、さまざまな市場での流通取引が正常に成立しているということ、すなわち生産された商品が市場ですべて販売されるということ」を当然の帰結としない」という点でも、スミスの議論とは異なる。テレンス・ウィルモット・ハチソンはこうしたテュルゴーの均衡論を「競争的均衡」論と評している。

論を精緻化・高度化したというところにある。主観価値学説、客観価値学説と自らの拠って立つ価値観はたがいに相違するものの、テュルゴーは明らかにケネーではなくカンティヨンの後継者であるといつてよい。ここに「カンティヨン→テュルゴー」のラインを描き得る根拠がある。

だが、それにもかかわらずテュルゴーはケネー学説の後継者であり、両者の理論的継承関係を主張する研究者がわが国にはすくなくない。手塚壽郎や山川義雄の研究がその代表例である。なかでも手塚は1933年に発表した論文「心理的經濟價值説の歴史的研究の一節——チュルゴーの *Valeurs et monnaies* の想源に就いて」のなかで、テュルゴーは「18世紀において價值を論じた者のうち、最も純粹に心理的見方をとつた人である。18世紀において、價值を人間の欲望にのみ基礎付けようとした者は〔テュルゴー〕の他にない。彼の價値論は18世紀に於ける心理的經濟價値論の *point cumulant*〔最高峰〕をなすものである」といつてテュルゴーの價値論を高く評価している。しかしそうした評価は1768、9年ころの作とされる未完の論稿「價値と貨幣」があつてはじめて可能となつたのであつて、手塚はこれをもつてテュルゴーの「重農學派的價値觀より心理的價値論への變轉」と解釈した。すなわち、「1767年又は1768年頃までは彼〔テュルゴー〕は重農學派の闘士の一人であつた。彼は〔「價値と貨幣」〕を書く2年前即1766年に〔『諸省察』〕を執筆してゐるが、此書は、價值を論ずる所、重農學派の純生産物論其まゝである。従つて〔「價値と貨幣」〕の價値論とは背反が際立つてゐる」としたのち、テュルゴーは「この2年の間にその價値觀を變へた」と言い及ぶのである。

たしかに手塚は『諸省察』には「不明瞭にして未だ發展せられてゐないが、2年後の〔「價値と貨幣」〕を豫想させるが如き思想が既に現れてゐないわけではない」といつう。しかしそれは、フェルディナンド・ガリアーニの「*Della Moneta* より暗示を得」た結果であつて、若きテュルゴーの小品「商業、貨幣の流通と利子および諸国家の富に関する著作プラン」から名著『諸省察』に至る一連の作品と「價値と貨幣」との間の断絶を強調する。テュルゴーの「價値觀を變へた」のは、あくまでもくだんのナポリ生まれの神父どのとジャン＝ジョゼフ＝ルイ・グラスランであり、このふたりなくしてテュルゴー價値論は成立しなかつたと結ぶ。山川も「わが手塚教授の詳細な考證に依つて明らかにされた」といつて、ガリアーニやグラスランがテュルゴーの價値論の形成に及ぼした影響を重視している。ただ山川にはこれをテュルゴーの「重農學派的價値觀より心理的價値論への變轉」と解釈することにはためらいがあるように見える。

手塚を待つまでもなく、テュルゴーがガリアーニやグラスランに影響されたことは認めなければならない。しかし、手塚説にはおよそつぎのような難点がある。すなわち、このふたりのテュルゴー價値論の形成過程における影響を強調するあまり、エティエンヌ・ボノ・ド・コンディヤック神父をはじめとする先学たちの思想的営みを軽視したことである。手塚自ら、ガリアーニがコンディヤックはもとよりジェミニアーノ・モンタナリにさえ言及しなかつたことを指摘してゐたのではないか。かたやグラスランは、ジャ

ン=クロード・ペロによると、コンディヤックを名指しこそしないけれども、ヴォーバン侯爵セバスティアン・ル・プレストル、ラ・ブレード=モンテスキューの男爵どの、アンリ・ゴワイヨン・ド・ラ・プロンバニ、フランソワ・ヴェロン・ド・フォルボネらと並んでカンティヨンの名をあげたうえで、「[グラスラン自身の] 知的営みがこれら先学の業績に負うことを躊躇せず認めている」といつている。そしてテュルゴーはといえば、かれがガリアーニやグラスランを知る以前に、カンティヨンやコンディヤックの思想的営みから多くを吸収したことは、まぎれもない事実である。山川が“わが手塚教授”の所説を全面的に容認し得なかった一半の理由がここにある。

はたしてそうであるとすれば、手塚のいわゆる「心理経済価値論の起源」の考究には異なる解釈が成立するはずである。それはこういうことである——。テュルゴーはいうに及ばず、ガリアーニ、グラスラン、それにコンディヤックらの諸研究はそれぞれがある程度までパラレルに行われ、かつ一定のオリジナリティを有しつつも、期せずしてテュルゴーというまれに見る傑才の手もとで総合され発展をとげて「18 世紀に於ける心理経済価値論の云はゞ *point cumulant* [最高峰] をなす」に至ったということである。フランスの研究者たちがテュルゴーの価値論を時に「感覚的経済価値論」と呼ばれるのは、テュルゴーの価値論のなかにガリアーニやグラスランの欲望理論のみならず、物の価値が人間の主観的評価にもとづくで見付けたコンディヤックの感覚的認識論の影響の跡を認め得るからである。

〈主な参考文献〉

- Cantillon, Richard [1755], *Essai sur la nature du commerce en général*: réimpression de l'édition de 1952 (sous la direction d'Alfred Sauvy avec le préface d'Antoin E. Murphy), fondée sur le texte original (*Essay sur la nature du commerce général*, à Londres, Chez Fletcher Gyles, dans Holborn) de 1755, avec études et commentaires revues et augmentées, Paris, Institut national d'études démographiques (I.N.E.D), 1997.
- Cartelier, Jean [2008], “L'économie politique de François Quesnay ou l'utopie du royaume agricole”, dans: *François Quesnay, Physiocratie: droit naturel, tableau économique, et autres textes*, édition établie par Jean Cartelier, Paris, GF Flammarion.
- Condillac, Etienne Bonnot de [1746], *Essai sur l'origine de connaissances humaines*, Œuvres complètes de Condillac, tome 1, Paris, Lecoq et Durey: reprinted in USA, Nabu Press, Nabu Public Domain Reprints, 2013. 古茂田宏訳『人間認識起源論（上・下）』岩波文庫、1994年。
- Faccarello, Gilbert et Anne Cot [1992], “Turgot et l'économie politique sensualiste”, dans: Béraud, Alain et Gibert Faccarello (sous la dir. de), *Nouvelle histoire de la pensée économique*, tome 1: Des scolastiques aux classiques, Paris, Éditions La Découverte.
- Graslin, Jean-Joseph-Louis [1767], *Essai analytique sur la richesse et sur l'impôt*: reprint,

- éd. Djalel Maherzi, Paris, Editions L'Harmattan, 2008.
- Hutchison, T. W. (Terence Wilmot) [1982], "Turgot and Smith", dans : Bordes, Christian et Jean Morange (sous la dir. de), *Turgot, économiste et administrateur: Acte d'un séminaire organisé par la Faculté de droit et des sciences économiques de Limoges pour le bicentenaire de la mort de Turgot, 8, 9 et 10 octobre 1981*, Limoges, Presses Universitaires de France: Publication de la Faculté de droit et de sciences économiques de l'Université de Limoges.
- Jevons, William S. [1881], "Richard Cantillon and the nationality of political economy", *Contemporary Review*, reprinted in Henry Higgs (ed) [1931], Richard Cantillon, *Essai sur la nature du commerce en général*, London, Royal Economic Association(reprint, Augustus Kelly, New York, 1964). 高野利治訳「カンティヨン論 (ジェヴォンズ)」、H. W. スピーゲル編、越村信三郎・伊坂市助監訳『経済思想発展史』I (経済学の黎明)、東洋経済新報社、1954年、所収)。
- Murphy, Antoin E. [1997], *Richard Cantillon, le rival de Law*, Paris, Hermann, Editeur des Sciences et des Arts,: traduction française par Hélène Syrès : originally published in English as *Richard Cantillon : Entrepreneur and Economist*, Oxford, Routledge, 1987.
- Perrot, Jean-Claude [1992], *Une histoire intellectuelle de l'économie politique (XVII^e-XVIII^e siècle)*, Paris, Editions de l'Ecole de Hautes Etudes en Sciences Sociales (EHESS).
- Quesnay, François [1757-8], "Hommes", dans: *Œuvres économiques complètes et autres textes*, tome 1, édités par Christine Théré, Loïc Charles et Jean-Claude Perrot, Paris, Institut national d'études démographiques (I. N. E. D.), 2005.
- Quesnay, François [1767], "Maximes générales du gouvernement économique d'un royaume agricole", dans: *Œuvres économiques complètes et autres textes*, tome 1, édités par Christine Théré, Loïc Charles et Jean-Claude Perrot, Paris, Institut national d'études démographiques (I. N. E. D.), 2005.
- Ravix, Joël-Thomas et Paul Marie Romani [1997], "Le < système économique > de Turgot", dans : *Turgot : Formation et distribution des richesses, textes choisis et présentés* par Joël Thomas Ravix et Paul-Marie Romani, Paris, GF Flammarion, 1997.
- Smith, Adam [1776], *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited, with introduction , notes, marginal summary and an enlarged index by Edwin Cannan, M. A., New York, Random House, 1937; reprinted 1965. 大河内一男訳『国富論』、『世界の名著』31、中央公論社、1968年。
- Spengler, Joseph J. [1952], "Cantillon: l'économiste et le démographe", dans: Richard Cantillon, *Essai sur la nature du commerce en général*, sous la direction d'Alfred Sauvy, Institut national d'études démographiques (I.N.E.D.), Paris, 1997: réimpression de l'édition de 1952.

- Steiner, Philippe [1992], “L'économie politique du royaume agricole: François Quesnay”, dans: Alain Béraud et Gibert Faccarello (sous la dir. de), *Nouvelle histoire de la pensée économique*, tome 1: Des scolastiques aux classiques, Paris, Éditions La Découverte, 1992.
- Tiran, André [2005], “Introduction à la vie et à l'œuvre de Ferdinando Galiani”, dans: Galiani, Ferdinando [2005 (1751)], *De la monnaie/Della Moneta*, édité et traduit sous la direction de André Tiran et traduction coordonnée par Anne Machet, Paris, Editions Economica.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1753-1754], “Plan d'ouvrage sur le commerce, la circulation et l'intérêt d'argent, la richesse d'états”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome II, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913-1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1766b], *Réflexions sur la formation et la distribution des richesses*, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome II, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913-1923.
- Turgot, Anne Robert Jacques [1767], “Observations sur un mémoire de M. Graslin”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome II, Paris, Librairie Félix Alcan,
- Turgot, Anne Robert Jacques [1769], “Valeurs et monnaies (Projet d'article)”, éd. Gustave Schelle, *Œuvres de Turgot et documents le concernant*, tome III, Paris, Librairie Félix Alcan, 1913-1923.
- 久保田光明 [1936]、「ケネーの価値理論」、早稲田大学政治経済学会『早稲田政治経済学雑誌』第 46 号、所収（のちに久保田明光 [1955]、『ケネー研究』時潮社に再録）
- 手塚壽郎 [1929a]、「ガリアニの Della Moneta に就て」、神戸高等商業学校『国民経済雑誌』第 47 卷第 2 号、所収。
- 手塚壽郎 [1933]、「心理的経済価値説の歴史的研究の一節——チュルゴアの Valeurs et monnaies の想源に就いて」、福田徳三博士追憶論文集（神戸高等商業学校『国民経済雑誌』第 55 卷第 2 号）、所収。
- 中川辰洋 [2011]、『ジョン・ローの虚像と実像——18 世紀経済思想の再検討——』青山学院大学経済研究所 研究叢書 7、日本経済評論社。
- 中川辰洋 [2013b]、『チュルゴア資本理論研究』、日本経済評論社。
- 中川辰洋 [2014/2015]、「カンティヨン経済理論研究 (I・II・III・IV)」、青山学院大学経済学会『青山経済論集』第 66 卷第 3、4 号、第 67 卷第 1、2 号、所収（ただし IV は予定）。
- 櫻井毅 [1968]、『生産価格の理論』東京大学出版会。
- 山川義雄 [1948]、「十八世紀佛蘭西主観価値論の形成——ガリアニ・チュルゴア・コンジャック——」、早稲田大学政治経済学会『早稲田政治経済学雑誌』第 96 号、所収。
- 山川義雄 [1960]、「チュルゴアの価値論の変遷について」、早稲田大学政治経済学会『早稲田政治経済学雑誌』第 163 号、所収。